

3-5. 小山市渡良瀬湧水地治水推進・ラムサール賢明な 活用・周辺整備推進期成同盟(栃木県小山市)

(1) 地域の概要

1) 小山市の概要

【人口】

165,175人(平成25年10月1日)

【地勢】

栃木県南部に位置し、東京圏からは北に約60km、県都宇都宮市からは南に30kmの距離にある。市域の東側は茨城県に接しており、隣接市町は東に真岡市・茨城県結城市及び筑西市、南に野木町・茨城県古河市、西に栃木市、北は下野市に接している。

地形は、関東平野のほぼ真ん中でほとんど起伏がなく、市中央部には思川が、東部に鬼怒川が、西部に巴波川が流れている。

鉄道は、南北のJR宇都宮線と東北新幹線を軸に、東からJR水戸線、西からJR両毛線が小山駅で結節し、道路は、国道4号と新4号国道、国道50号の広域幹線道路が市内を貫通しており、交通の要衝地となっている。

【面積】

171.61km²

【気候、自然】

小山市は、やや内陸性をおびた太平洋側気候を示し、おおむね温暖で住みよい気候であるといえる。また、冬季の乾燥した北西の強い季節風「男体おろし」や夏に見られる激しい雷は特徴的な風物詩である。

市の中央に思川、東に鬼怒川、西に巴波川などが流れ、本州以南最大の湿地で平成24年7月3日にラムサール条約湿地に登録された渡良瀬遊水地や国のため池百選に選定された羽川大沼等のほか、周辺部には農地や平地林が広がる「水と緑と大地」の豊かな自然環境と、美しい田園景観を有している。

また、多様な都市機能が集積した市街地を集落地・農地が取り囲む、都市と田園の調和のとれたまちを形成している。

【歴史】

小山市は、縄文時代の寺野東遺跡や古墳時代の琵琶塚古墳・摩利支天塚古墳、鎌倉室町時代下野国の守護を務めた小山氏の居城祇園城跡等7箇所の国指定文化財など、古来から連綿と続く、数多くの誇れる歴史的・文化的資産を有している。

特に、本市は、徳川家康が上杉景勝討伐に会津に向かう途次、小山の地で石田

光成挙兵の報が入り、急きよ軍議「小山評定」を開き、関ヶ原の戦いでの東軍勝利へと日本の行く末を決定づけた歴史にちなんで「開運のまち」として全国発信している。

【観光】

恵まれた立地条件を最大限に生かした、都市と農村の交流を推進しており、国道50号沿には、都市と農村の交流拠点施設としての道の駅「思川」や市民農園が、中心市街地には、まちの駅「思季彩館」が観光情報交流センターとして設置されている。

【地域資源】

平成22年11月にユネスコ無形文化遺産に登録された本場結城紬をはじめとして、伝統工芸、農畜産物、歴史などを小山ブランドとして創生・発信を推進している。また、北関東最大級の「小山の花火」のほか、「間々田八幡宮蛇祭り」「胸形神社花桶かつぎ」など各地域の伝統行事も数多く行われている。

2) 派遣地域（渡良瀬遊水地及びその周辺地域）概要

小山市南西端に位置する渡良瀬遊水地は、4県4市2町（栃木県栃木市・小山市・野木町、群馬県板倉町、埼玉県加須市、茨城県古河市）にまたがる面積約3,300haを有する日本最大の遊水地である。渡良瀬遊水地内には、渡良瀬川、思川、巴波川の3河川が流れており、大きな洪水の時には、3河川の水を調節池に溜めて、利根川本川の洲流量に影響を与えないようにする役割を持っている。このように渡良瀬遊水地は利根川水系の治水に大きな役割を果たすとともに、世界的に湿地面積が減少する中1,500haのヨシ原に絶滅危惧種183種を含むたくさんの動植物が生息する自然の宝庫として、貴重な存在となっている。このようなことから、渡良瀬遊水地は、平成24年7月3日にラムサール条約湿地に登録された。

渡良瀬遊水地に隣接する生井地区は、西は栃木市と東は野木町に接し、思川と与良川に抱かれた自然豊かな田園地帯である。生井地区は栃木県内でも最も標高の低い地域で、昔から度重なる水害に悩まされてきた地区で、そのような土地に暮らす人々の知恵として母屋より高く土盛りした「水塚」や洪水時の一時的な移動手段としての「揚舟」が今でも残っている。また、養蚕業・生井桑摘み唄、ヨシ産業など歴史的・伝統的な文化資源が継承されている。

寒川地区は、小山市の南西部、国道50号の南に位置し、西側は栃木市に隣接しており、地域内には、巴波川や永野川、与良川が流れる自然豊かな田園地帯である。生井地区と同じように、昔から水害に悩まされてきた地区で、巴波川決壊口記念公園が堤防強化と地区の環境向上のために整備されているほか、地域内には、胸形神社の「花桶かつぎ」や毘沙門山古墳など、歴史・伝統文化的な資産が存在する。

【人口、面積】（平成25年10月1日）

生井地区 1,982人 12.16km²

寒川地区 1,545人 6.43km²

【地域資源、歴史、観光など】

生井地区

治水（水塚・揚舟）：水害の多い土地に暮らす人々の知恵として、母屋より高く土盛りした「水塚」や洪水時の一時的な移動手段としての「揚舟」が今も残る。

ヨシズ産業：渡良瀬遊水地に広がるヨシ原で収穫されたヨシは、ヨシズや茅葺き屋根の原料として出荷。

養蚕業・生井桑摘み唄：明治から戦前まで養蚕業が盛ん。その養蚕文化を語り継ぐための「生井桑摘み唄」。

川魚淡水魚漁：水と共に運ばれてく上流の肥沃な土壌が川や沼を豊かにして様々な漁が行われ、川魚を使った食文化が発展。

生井桜づつみ：「渡良瀬遊水地の桜づつみからの富士」が国土交通省の「関東富士見百景」に選定。

白鳥八幡宮古式祭礼：鳥居につるされた鬼の面を射る「鬼面射弓」。その年の悪霊の村への侵入をはばもうとする行事だといわれている。頭屋制の名残を今に伝える貴重な祭り。

寒川地区

巴波川決壊口祈念公園：堤防強化と地区の環境向上のため整備された桜づつみ。

胸形神社花桶かつぎ：美しく着飾った7歳の女の子が花で飾られた桶をかつぎ、夜道を神輿・山車とともに、天満宮から胸形神社へと寒川地内を歩く。

毘沙門山古墳：田園風景の中に浮かぶ5～6世紀(推定)築造の古墳。

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) 派遣申請の背景

小山市南西端に位置する渡良瀬遊水地は、面積 3,300ha を有する日本最大の遊水地で、利根川水系の治水に大きな役割を果たすとともに、絶滅危惧種 183 種を含む貴重な動植物が生息する自然の宝庫となっており、平成 24 年 7 月 3 日にラムサール条約湿地に登録された。小山市では、第 1 に治水機能確保を最優先とした「エコミュージアム化」、第 2 に「トキ・コウノトリの野生復帰」、そして第 3 に「環境にやさしい農業を中心とした地場産業の推進」を「賢明な活用の 3 本柱」として、多くの人を呼び込み地域振興を図るため「渡良瀬遊水地関連振興 5 ヶ年計画」を策定し、その推進に努めている。

また、渡良瀬遊水地周辺は昔から水害に悩まされてきた地区で、そのような土地に暮らす人々に知恵として母屋より高く土盛りした「水塚」や洪水時の一時的な移動手段としての「揚舟」が今でも残っている。さらに養蚕業・生井桑摘み唄、ヨシ

産業など歴史的・伝統的な文化資源が継承されており、それら地域の誇りである文化資源を保存、有効活用して、地域活性化の推進を図っている。

2) 地域課題

- ・渡良瀬遊水地をはじめとした地域資源の魅力が市民にあまり認識されておらず、また地域の人も身近な存在がゆえに、地域の魅力として感じられていないところがある。
- ・エコツーリズムとは何か、エコツーリズムに対する共通理解が、市役所内部や地元・関係団体内で十分にされていない。
- ・小山市では渡良瀬遊水地関連振興5ヶ年計画に基づき、渡良瀬遊水地及びその周辺地区を対象とした各種事業を推進している。将来的にそれら各取組をどのように魅力的なエコツアープログラムとして組み合わせていくのが課題となる。
- ・ガイドの発掘や育成、働く場の確保が大きな課題となっており、エコツーリズムの推進にあたって中心的な役割を果たす人物（コーディネーター的役割）の育成、また運営団体の育成が必要である。
- ・渡良瀬遊水地は4県4市2町にまたがり、また多くの市民団体・関係団体が関わっているなど、多種多様な主体が存在している。それら多様な主体の協働・連携・ネットワークの構築が重要である。

(3) アドバイザー派遣の概要

日	時	平成26年12月15日(月)～16日(火)
場	所	栃木県小山市(渡良瀬遊水地及びその周辺地域)
アドバイザー		鈴木 順一郎氏
参加者		45名
スケジュール・方法		<p>【1日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミーティング(渡良瀬遊水地ラムサール推進室、市役所関係課) ・現地視察(渡良瀬遊水地、生井桜づつみ、与良川排水機場、生井地区) <p>【2日目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミーティング(渡良瀬遊水地ラムサール推進室、市役所関係課) ・懇談(地元期成同盟会役員) ・講演(地元期成同盟会委員)

(4) アドバイスの内容

1) 現地視察

渡良瀬遊水地及びその周辺地域（主に生井地区）の現地視察を行った。

- ・ 渡良瀬遊水地（越流堤・第二排水門、鷹見台、谷中湖、湿地資料館）、生井桜づつみ与良川排水機場
- ・ 生井地区（ヨシズ農家、ふゆみずたんぼ、ホンモロコ養殖場、水塚・揚舟、旧思川、しんますや（ホンモロコ料理の試食））
- ・ 道の駅思川

2) 市関係課とのミーティング・アドバイス

① 渡良瀬遊水地ラムサール推進室

ア. 現状・課題等

渡良瀬遊水地関連振興5ヶ年計画の推進

- ・ 平成24年7月3日にラムサール条約湿地に登録された渡良瀬遊水地の賢明な活用として、第1に治水機能確保を最優先とした「エコミュージアム化」、第2に「トキ・コウノトリの野生復帰」、そして第3に「環境にやさしい農業を中心とした地場産業の推進」を賢明な活用の3本柱に、多くの人を呼び込み地域振興を図るため「渡良瀬遊水地関連振興5ヶ年計画を策定し、その推進に努めている。

イ. 助言等

- ・ 市役所内の様々な課が関わっているものであり、全部の課の共通認識がなされないといけない。言うまでもなく、ラムサール推進室がその中心的役割を果たさなければならない。一体的に進めなければ、一般の方からはバラバラに見えてしまう。しっかりと連携できるよう音頭取りをお願いしたい。
- ・ 関係者以外は、ラムサール条約の意味をあまりわかっていない。渡良瀬遊水地がいかに貴重な存在であり、ラムサール条約湿地に登録された意味を市全体に伝えていくことが重要である。
- ・ 渡良瀬遊水地の賢明な活用の土台・ベースとして、エコツーリズムの考え方をぜひ活用していただきたい。渡良瀬遊水地及び周辺地域の環境を保全しつつ、たくさんの人に来ていただき、結果としてお金を落としてもらおう。
- ・ 小山駅や道の駅思川にラムサール条約・渡良瀬遊水地の紹介・PRコーナーを設置した方が良い。

② 農政課

ア. 現状・課題等

i. ふゆみずたんぼ

- ・ 環境にやさしい農業を中心とした地場産業の推進の中心的取組。コウノトリ・

トキの野生復帰にも大きく関わっている。

- ・周辺水田のラムサール条約湿地登録に向けては更なる環境整備が必要（無農薬と減農薬）。
- ・地元の協議会が主体となっている。補助金を無くした場合、その後協力してくれるかどうか心配。また、協議会メンバーは全員が高齢者で、後継者問題もある。
- ・コウノトリやトキが来ただけでは収入が上がらない。プラスアルファが必要。販売先確保も重要。実際に現金が伴わないといけない。
- ・昭和 40 年代にお金をかけ圃場整備し、米・麦をつくれるようにしたのに、今さらという感がある。冬に水を張ると麦が作れない。米だけの収入になってしまう。

ii. ホンモロコ

- ・ふゆみずたんぼ農家の収入確保の取組である。今後の生産拡大、販路拡大が課題となっている。

イ. 助言等

i. ふゆみずたんぼ

- ・ふゆみずたんぼの意味を、いかに伝えていくかが重要。
 - ・子どもたちにふゆみずたんぼに素足で足を突っ込んでもらったり、泥の感覚を覚えさせる。泥を楽しんでもらう。
- ⇒（農政課）田植え前にふゆみずたんぼでドッジボールをやってみたいと考えている。
- ・雑草を手で抜くなどを子どもたちに体験させる。自分たちが手伝った実感が大切である。
- ⇒（農政課）通常は、田植えと稲刈りの体験だけだが、草取りや水管理なども含めて全部できればいい体験になると思う。
- ・ふゆみずたんぼは生き物を育むたんぼである。生き物観察なども入れて、そこに付加価値をつけてはどうか。
 - ・農家も子どもの教育のためなら、将来のためなら、協力してくれる。子どもたをうまく利用していただきたい。

ii. ホンモロコ

- ・川魚だけれども非常に品のいい味。日本酒とも非常に合う。日本酒とセットで売り出してみてもどうか。
- ・子どもには「せんべい」のようにすると食べやすい。栄養的にも優れており、アピールポイントになる。
- ・ぜひ名前に「おやま」を入れていただきたい。ラムサールホンモロコでは、知らない人はイランから持ってきたと思ってしまう。他の物もラムサールの前に

「おやま」を付けた方がいい。

③農村整備課

ア. 現状・課題等

i. 渡良瀬遊水地への研修施設の整備

- ・新たな研修施設はどういった利用が想定されるのか。
- ・エコミュージアム整備や観光との関係はいかにすべきか。

ii. フラワーロードの整備

イ. 助言等

- ・どうしても拠点施設は必要になってくる。博物館的要素が必要。ラムサール条約登録湿地として価値が高いものだとわかるような展示。ラムサール湿地の権威を表明していくこと。権威が高まらないと、価値が出てこない。
- ・学芸員等を置いて、何に対しても答えられるようにすることが大事。そうすると周りの意識もどんどん変わってくる。
- ・人が滞在するには飲食ができる、道の駅的なものも必要になる。
- ・施設は学術的な要素で固めた方がよい。研究施設のイメージを持たせることがひとつ大事である。それにプラスして、一般の人たちが集まることができる施設として、飲食、お土産。
- ・飲食やお土産も地元の人たちの還元となるようなものでないといけない。ただし、地元任せすぎると問題で、行政がどのように適切に関与していくかが重要。
- ・展望スペースに望遠鏡。ただし、屋上だと動物が逃げってしまうので、屋内に整備した方がよい。藤前干潟がよい事例である。
- ・施設は生井桜つつみあたりにあるといいと思う。また、飲食・お土産施設の中に案内所を設置し、それをうまく機能させていけると非常にいい。
- ・フラワーロードについては、拠点施設をまず考え、拠点施設を考えながら進めるとわかりやすくなる。

④商業観光課

ア. 現状・課題等

ヨシの活用

- ・使用用途の拡大を図っていきたい。

イ. 助言等

- ・ブランディングのキーは、なぜヨシ紙を使うことを進めるのか、強力な理由づけがあると定着していく。理由づけをしっかりと、勝手に走っていくが、それがないと、どんなに頑張っても定着しない、使ってもらえない。
- ・ストーリーが重要である。今から90年前に遊水地が作られ、生態系が保全・再生され、ラムサール条約に登録された。そして、ヨシ焼きなど人の手が入っ

て自然が保たれていおり、ヨシと人々が共に生きてきた。それを忘れないための「ヨシ紙」など。

- ・紙なのでいろんなアイデアがあると思う。折り紙もいい。ふゆみずたんぼで千羽コウノトリのイベントでもやれば注目され、絶対にマスコミも来る。
- ・折り紙も、渡良瀬遊水地の動植物、チュウヒ、カモなどいろいろなものを作れる。渡良瀬遊水地の動物、植物のトランプやかるたも面白い。
- ・ヨシ紙は色のをせるとくすむ。くすんだ色は、古代色、和の色に近づく。味のあるものが作れる。和食屋での箸入れなど、可能性は無限大。
- ・環境教育にも使える。ヨシ紙を使った絵画コンテストはどうだろうか。子どもたちに将来の種として植えつけることが大事。
- ・動物図鑑のような子供向けの冊子、大人向けには写真集。すべてヨシ紙でつくる。写真集もシリアルナンバーなどをつけてプレミアム感を出すとよい。
- ・体験施設でのヨシ紙づくり体験や、お土産でのヨシのペーパークラフト。
- ・渡良瀬遊水地のPR・宣伝に使うものはすべてヨシ紙が理想だと思う。

⑤建設政策課

ア. 現状・課題等

i. エコミュージアムの整備

- ・国土交通省の湿地再生掘削による浅い池、深い池等を活用し、自然観察・体験の場として整備を図っている。
- ・全体およそ15年計画で国が掘削していく。短期の5年でいろいろ実験的なことをやっていきたい。
- ・ひとつの課題が木道整備と8.6ha掘削池の維持管理である。
- ・おもしろいゾーン分けはどのようなものか。

イ. 助言等

- ・エコミュージアムは流行で、いろいろなところでやっている。ただ、どこもエコミュージアムのエリアが明確でない。エリアが子どもでもわかるようにきちんとする必要がある。
- ・実は、都会に住む人は、山や川にきても、そこに入っていいのかわからないものである。エコミュージアムは、しっかりとエリアを決め、ルールの中で自然と触れ合えるものである。
- ・ヨシの間の木道は、ヨシが高いのでまるで迷路、横からヨシを見ても何も面白くない。ヨシの上に出る高さから覗くととてもおもしろい。普段入れないところに入るアドベンチャー感が大事。沖縄では、マングローブ林で海の上に木道を設置しているところがある。上から見ると生き物がよく見える。エコミュージアムとして目立つ存在になる。
- ・ヨシ焼きのときに撤去できる木道はどうか。ヨシ焼き後、再度設置して、ヨシ

焼後の再生の観察もできる。

- ・コツはディズニシーを作るイメージ。ここに行けば、これが見れるというゾーニングが重要。また、エンターテインメント性を入れる。
 - ・ありがちなのは教育的・環境保護団体的になりすぎる。それを嫌う人は来ない。まずは楽しんでもらい、結果として学んでもらい、環境保全につなげることができる。
 - ・特定のリピーターだけでなく、どんどん広げていくことが大事。
 - ・看板でゾーン・エリアが一目でわかるようにしないといけない。観察できる動植物や観察のコツなどを記載する。看板自体も動物の形をしていても面白い。
 - ・揚げ舟を使って、水路に舟を回すというのも面白い。スポーツ要素を入れるとカヤックが面白い。カヤックは目線が水面に近い。土手の上から立ってみるとどうしても自分中心だが、自然の中から、自然からの目線で見るととても印象に残る。
 - ・ゾーニングには研究施設で何を主にしてしたいかが重要。ゾーン分けの考えが今出てこないのは、ベースとなる研究機能がないからである。意味づけをしていくと長く続く。
 - ・一つ提案として、プレ的、模擬的にプレエコミュージアムはいかがか。小さいエリアでもいいので、実験的に体験してもらった方がいい。
- ⇒ (建設政策課) 今年掘削したところ (8.6ha の掘削池) で試験的に考えている。

⑥生涯学習課

ア. 現状・課題等

ガイドの育成

- ・今年度渡良瀬遊水地講座として年4回実施、来年度はガイド養成コースとして年8回程度の実施を予定している。
- ・ガイドの養成方法を確立し、またガイドマニュアルを作成していかなければならない。
- ・ガイドのモチベーション維持、一生懸命続けられるコツなどはあるのか。

イ. 助言等

- ・第一にボランティアガイドがよいのかどうかの話がある。ボランティアガイドのデメリットは責任を持たせられないということ。リスクマネジメントが重要。
- ・ボランティアに対して強く言えない部分もある。やはりボランティアとしては限界点がある。
- ・ガイドを使ってリピーターが増えるのは、ガイドに惚れてくれるからである。新しい話題を常に提供してくれるガイドが不可欠である。
- ・ボランティアガイドをまとめるプロのガイドが必要である。NPOなど、もしくは市内部に市職員でプロのガイドを育成するなど。やはりボランティアはボ

ランティアで、実際にボランティアガイドでの失敗例をたくさん見てきた。ガイドで食べているNPOなどのプロのガイドは迫力も知識も違う。

- ・ボランティアガイドが全部だめということではなく、最初はボランティアガイドをテスト的にやってみてもよい。ただし、次の段階でプロの血を入れないといけない。NPO等のガイドの下でボランティアガイドをうまく使う。NPO等が指導的立場に立って、またマニュアル作成などもそこに任せればよい。狭山丘陵が良い事例である。
- ・ボランティアがいけないのではなく、ボランティアを育てていきながら、責任を持てる所と将来ジョイントしないといけない。
- ・一番大事なのはリスクマネジメント。例えば、高齢者が倒れた時に、心臓マッサージから搬送まで、マスターするのはガイドの使命
- ・今からできることは、ボランティアガイドを指導する専門家を見つけ、その方の指導のもとガイドの養成をしていく。
- ・ボランティアガイドは、実は本来のボランティアではない。時間とお金があり、興味があるから、ガイドをする、下手をすると自己満足になってしまう。そこに使命感を持ってもらうには、次世代に伝えるという使命、自分たちが伝えないとなくなってしまうという危機感、これしかない。
- ・まずは、プレエコミュージアムで小学生などのガイドをして、子どもたちの反応を見るとわかりやすい。実感してもらうしかない。

3) 懇談

地元団体（渡良瀬遊水地関連地域活性化協議会）役員からの意見聴取

- ・一番つらいのは、若い人たちが住まないこと。地元の小学校は市内で一番子供が少ない小学校である。地理的には非常に便利な場所だが、過疎化が進んでいる。
- ・ラムサール条約湿地登録で盛り上がっているが、若い人が気持ちよく住める地域ではない。地元の団体数が多く、自治会の役員など避けてしまう。地元の行事も多い。
- ・50年、100年後に住んでいる人たちが喜ぶように、今考えて行動していかなければならない。
- ・ただし、頭からしっぽまでを全部小山市がやるのではなく、地元で、みんなでやっっていこうという地域にしていきたい。

4) 講演

①エコツーリズムとは

- ・エコツーリズムの基本的な考え方は、今ある自然を保全しながら、多くの方に来てもらって、楽しんでいただきながら、自然の良さを感じてもらい、地域に

お金を落としてもらう。

- ・今後渡良瀬遊水地でいろいろな事業が行われるとき、エコツーリズムの考え方が役に立つと思う。

②ラムサール条約登録湿地渡良瀬遊水地の魅力

- ・VTR「日本のラムサール湿地」を紹介。
- ・ラムサール条約登録湿地は価値がある。日本の登録湿地は皆有名なところばかり。渡良瀬遊水地もこれらに肩を並べる、非常に価値の高い存在。保全していかなければならない。
- ・渡良瀬遊水地の自然が当たり前。今さら大事だといわれてもピンとこないと思う。しかし、実はなくなってしまって初めて気づく。
- ・エコミュージアムを実はよくわからないという方が多い。実際にわかりにくいものである。自然そのものが自然の博物館という意味である。渡良瀬遊水地は相当広く、防災面や鳥の営巣地などもあるので、全体をエコミュージアムとは言えない状況である。今後小山市では、実験的に小さなエリアを決めて進めていくようである。
- ・渡良瀬遊水地は世界に誇れる例だと思う。90年前に防災の目的でつくられ、人々の生活に近い、人とのかかわりが他の湿地よりも大きい。それは、これからも人が関わっていかないと保てない湿地でもある。
- ・小山市の方へお願いがある。渡良瀬遊水地が価値のあるものだとして小山市全体に広報していただきたい。私は、生物の数が多きことに非常に驚いた。これだけのものを持っている、宝であるということに皆の気持ちが向かないといけない。そうすると、渡良瀬遊水地を地元だけでなく市全体で考えるようになる。もう一つ、渡良瀬遊水地の中に人が集える拠点づくりを進めてほしい。すでに構想はあるが、博物館的な役割を持たせて、まずは小さいエリアからわかりやすく伝えてほしい。

⇒（小山市）市の渡良瀬遊水地ラムサール推進室が中心となって、3本柱の賢明な活用の推進や、先ほどのアドバイスにもあったPRを積極的に進めていきたい。

- ・この地域は、だんだんと人が増えてくる。対応策をとらないといけない。特にごみで、弁当ごみなどはカラスが増える原因になる。ヤンバルクイナの森も、弁当ごみでカラスだらけになってしまった。生態系が変わってしまう。
- ・どこから渡良瀬遊水地を見るのがきれいか。実は昨日一周してきたが、栃木市のハート湖は明らかに人が遊ぶところ。小山市側は、自然の生き物がのびのびと遊んでいる。それをうまく利用するのが、人を集めるコツである。
- ・素晴らしいヨシ原が広がっている。ヨシが高いので高架木道がいい。ヨシ原は上から見ると魅力が伝わる。いつも入れないところから見るアドベンチャー感

が大切。沖縄のマングローブ林も、陸から見ると上から見るとだと全然違う。工夫できれば人もたくさん来る。ヨシ焼きのときは、たとえば一度取り外せて、終わったとき戻せるような木道はどうか。

- ・次の世代に、ヨシ原の大切さ、文化・生活とのつながりが伝わりにくい。今の皆さんが伝えないといけない。小山市の子どもたちにツアーを行ってぜひ伝えていただきたい。

③質疑応答

(参加者) 小山市の小学生に春の新緑の渡良瀬と、秋のヨシ原、年2回は授業の中に入れてほしい。

(小山市) 今年始めたバス補助制度を使って小学校が続々ときている。ただ、今後どういう風に見せるのか、新緑や秋のヨシ原などいいところを見せられるように検討していきたい。

- ・学校だけに限らず、いろいろな方に来ていただき体験をしてほしい。
- ・そのためにはガイドが必要。皆さんには積極的に参加していただきたい。
- ・人がたくさん来ると近隣の人の意識も変わってくる。日本にいろんなラムサール条約登録湿地があるが、実は湿地のすぐ隣に住む人がラムサール条約や湿地についてよく知らないことが多い。関係者だけが一生懸命で近くの人に意義が伝わっていないことがある。
- ・地元で取り組む、ラムサールふゆみずたんぼ、ラムサールホンモロコがあるが、ぜひ「おやま」という言葉を入れてほしい。ラムサールと聞くとラムサール条約を知らない人は、イランのラムサールを思い浮かべる。知らない人からしたらイランから連れてきた魚になってしまう。「おやま」をつけるようにしていただきたい。
- ・ふゆみずたんぼ。雑草を抜くときに子どもたちに裸足で泥に入らせて雑草取りをさせると、とても喜ぶ。今の子どもたちは裸足で泥の中に足を入れるだけで喜ぶ。田植えや収穫の体験は行っているようだが、雑草抜きなどその途中の体験もとても大切である。
- ・市ではヨシ紙を作っている。子どもたちが千羽コウノトリを作ってふゆみずたんぼに飾るなどすれば、マスコミが必ず来て、注目される。
- ・日本全国を回ってきて感じたことは、自然は変化していき、時に無くなってしまいうものもある。そして、無くなる時はあっという間に無くなるということもある。無くなる手前で気づく感覚を持つかどうか。次の世代に伝えるためになるべく五感を使って覚えてもらうしかない。小学生のうちに、ヨシ原の中での体験をやってもらうなどが大切である。それを面白くするために、エコミュージアムや拠点施設が必要で、エコツーリズムの考え方も重要になってくる。まずは、渡良瀬遊水地の価値をもう一度見つめなおしていただきたい。

【記録写真】



①現地視察 ヨシズ農家



②現地視察 ふゆみずたんぼ



③市関係課とのミーティング



④地元住民向け講演会

(5) アドバイザー派遣の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

- ・エコツーリズムの基本的な考え方を理解できた。
- ・身近にある当たり前の存在である渡良瀬遊水地が、いかに素晴らしい価値を持つのか再認識できるきっかけとなった。また、それを次世代へ伝えていくことの大切さを気づかされた。
- ・渡良瀬遊水地関連振興5ヶ年計画を推進していく上で、行政とは異なる視点で様々なアドバイス・ヒントを頂き、市関係者にとって、今後の事業展開に向け、非常に貴重なきっかけ作りの場となった。

2) 今後期待される効果

- ・渡良瀬遊水地の賢明な活用にあたり、エコツーリズムの考え方を土台・ベースとしてうまく活用ができる。
- ・渡良瀬遊水地の価値やラムサール条約湿地登録の意味を広く「伝える」ことに

よって、市全体の盛り上がりにつなげることができる。

3) 今後の取組

- ・渡良瀬遊水地の魅力・価値を外部に発信することももちろん重要だが、渡良瀬遊水地がラムサール条約湿地に登録された意味を含めて内部・市民全体に対して積極的に周知・PRする取組を進めていきたい。
- ・アドバイザーから頂いた助言を活かしながら、またエコツーリズムの基本的な考え方をベースにうまく活用しながら、渡良瀬遊水地関連振興5ヶ年計画を推進していきたい。なお、事業推進にあたっては、市関係課、また地元やNPO等関係者との更なる連携・協力体制の構築と適切な役割分担を図っていきたい。

(6) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

1) 参考となった事項

アドバイザーが製作されたVTR「日本のラムサール湿地」を交えながら、ラムサール条約登録湿地の価値についてお話しいただき、参加者一同、渡良瀬遊水地の価値、渡良瀬遊水地がラムサール条約湿地に登録された意義というものを改めて考えるきっかけとなった。

また、沖縄マングローブ林の木道の映像など、具体的事例として非常に参考となった。

2) その他感想

渡良瀬遊水地の賢明な活用に関する各種事業に対して、外部の視点から様々なご指摘やご提案を頂き、今後の事業展開を行っていく上で大変参考となった。また、何より、渡良瀬遊水地の魅力・価値について、地元住民だけでなく、われわれ行政側としても再発見することができた。

最後に、今回、この「エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業」を活用して本当に良かったと感じています。どうか今後ともご指導のほどよろしく願いいたします。

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

環境映像ディレクター・プロデューサー 鈴木順一郎 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

小山市南西にある渡良瀬遊水地は、貴重な動植物が生息する自然の宝庫として平成24年にラムサール条約湿地に登録された。この渡良瀬遊水地は、4県4市2町にまたがる日本最大の遊水地だが、小山市側の自然は特にその貴重性が高い。これを受け、小山市ではラムサール条約湿地としての渡良瀬遊水地を核とした観光やエコミュージアム化、また環境教育等を5カ年計画として進行中である。今回、小山市は、エコツーリズムの考え方をどのようにこの5カ年計画の中に落としこめるか模索した。

②課題

ラムサール条約湿地に登録されたことから、5カ年計画が作られ、渡良瀬遊水地を核とした地域活性化を目指しているわけだが、まだまだ一部の行政関係者や関係する学者にしかラムサール条約湿地に登録された価値が伝わっていないのが現状である。登録されたことが先行してしまい、その価値をしっかりと広報することが必要である。その認識が確立されてこそ、官民一体の地域づくりが推進されると思われる。つまり、こうした共通の認識がなければ、目的達成のために関係するすべての人々が同じ方向に歩けない。小山市渡良瀬遊水地ラムサール推進室では、こういったことも含め、今後どのように5カ年計画に対して結果を出していくのかを課題としていた。大変熱意のある推進室であり、それだけに、小山市内の関係する部署と地域住民をどのように牽引し、どうすれば同じ方向に歩けるのか、ここにエコツーリズムの考え方を取り込むことによってどのような効果が期待できるのかが今回の大きな課題であった。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①魅力を感じた地域資源

特に魅力的なのは、言うまでもなく自然の豊かさである。ただしここでいう自然のすばらしさは、原生林的な豊かさではなく、人々が生活として自然を利用し保全を繰り返してきた結果、貴重な動植物の聖地が残されてきたということである。これが渡良瀬遊水地のどこにも負けない最大の魅力であり武器である。

②上記地域資源に魅力を感じた理由

ヨシ原を利用し使って生活してきた渡良瀬遊水地周辺の住民にとってここは生活の場である。そこにはルールがあり、毎年ヨシ焼きが行われる。こうした人々の生きるサイクルと自然のサイクルが同調し貴重な動植物が未だに残っているのである。言い換えれば、こうした人間の活動に、貴重な動植物が、四季の決まっ

たサイクルとして認識し、バランスを保ってきたという点が素晴らしい。いわば人と自然の共存を象徴するエコミュージアムそのものである。この点が非常に重要である。

3) アドバイス（講義等）の概要

今回、個別にアドバイスをさせていただいた箇所が多いため、細かなことは小山市からのレポートを参考にさせていただきたい。ここでは大きく二つのことを書かせていただく。

①行政へのアドバイス

ラムサール条約推進室が中心となって小山市行政内の各部署がそれぞれ5カ年計画に対して動いている。言ってみれば急に始まった政策に対し、それぞれ各部署のご担当は精力的にお考えになっているのだが、私の印象としては、同じ目的に向かってるように見えて実はどこに向かってるかを共有できていない印象であった。これは行政で陥りがちな問題である。大事なのはラムサール条約湿地を核とした5カ年計画を実行することが目的ではなく、5カ年計画を実行することで何ができるのか、どんな効果が期待できるのかを共通の認識にするかである。そういったコンセプトで各部署の方々にはアドバイスをさせていただき、その上でエコツーリズムがどのように関係してくるのかをお話した。

②地域住民へのアドバイス

事前の懇談で気づいたことは、地域住民の皆さんにとって、これまであたり前に存在し、利用し、生活してきた渡良瀬遊水地が、ラムサール条約湿地に登録された認識はお持ちであるのだが、何故、登録されたのかという理由・価値が伝わりきっていなかったという点である。大事なのは、何故登録されたかという「理由・価値」を伝えることである。あたり前に生活しているとその価値にはなかなか気づかないものである。そんなことから、エコツーリズムの考え方を解説した後、あらためてラムサール条約湿地に登録された意味や価値をお話させていただき、その上で、エコツアー等によるエコツーリズムの可能性をお話した。

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

現在は、まずはエコツーリズムの考え方をどのようにラムサール条約湿地と絡ませるかを模索されている段階なので、全体構想へ取り組む段階ではない。

②全体構想への意向について

ラムサール条約湿地であるというタイトルがあるので、これを今後どのように活かしていくかが課題であり、今現在、エコツーリズム全体構想よりも重要である。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

まずは現状を整理され、共通・統一的な具体的目標を絞り込むことである。その後、エコツーリズムをどのように取り入れ活かすかを検討していただきたい。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

渡良瀬遊水地は、幸いなことに4県4市2町にまたがる日本最大の遊水地である。つまり、小山市のエリアははっきりしている。そのため、小山市部分のゾーニングについて特色をつけやすい。4県4市2町にまたがることがデメリットになることも多いと思われるが、逆にそれをチャンスと捉え、エリアマネジメントに有効に活かしていただければと思っている。

人々が生活しながら保全・共存してきた渡良瀬遊水地を核とした地域の活性化には大きな期待と可能性を感じる。